企業探訪

日本名硯に数えられる「国寿石 大子硯」の後継者

国寿石（こくじゅせき） 大子硯工房「岱山（たいざん）」

作硯家 佐藤 岱山 氏

「国寿石 大子硯」は、日本名硯の1つに数えられます。その昔、常陸国（ひたちのくに）を治めていた佐竹氏は、この地で作られた硯を将軍に献上し、水戸徳川家は、硯の原石を「国寿石」と命名しました。

しばらく途絶えていた「国寿石 大子硯」ですが、先代の星野岱石（たいせき）氏が復活させ、現在は、湯治治療をきっかけに大子を訪れ、「国寿石 大子硯」の魅力にとりつかれた佐藤岱山氏が、後継者として硯を作り続けています。

伝統文化を受け継ぐ者として、「国寿石 大子硯」が作り出す独創的な世界観を「美術品」として昇華させていきたいと語る岱山氏の熱い想いをお聞かせいただきました。

インタビュー日：2018年11月19日
〔聞き手：筑波総研㈱ 専務取締役 藤咲耕一〕
〔文・写真：筑波総研㈱ 研究員 冨山かなえ〕

企業概要

工　　房：茨城県久慈郡大子町袋田753
創　　業：1947年（昭和22年）
事業内容：「国寿石 大子硯」の製造・販売

ご自身のご略歴、「国寿石 大子硯」との出会いについてお聞かせください。

棟梁に憧れ、技術を磨く少年時代

私は1947年（昭和22年）に秋田県鹿角（かづの）市で生まれました。鹿角市の北に位置する十和田湖は、年間を通じて美しい自然の景色が楽しめる観光地として、多くの観光客が訪れています。

地元の中学を卒業後、私は腕の良い棟梁が指揮を執る地元の建設会社へ丁稚奉公に出ました。当時、個人の家に風呂場があるだけでも珍しかったのですが、その棟梁の自宅には美しいタイル張りの風呂場があり、私は大変驚きました。

棟梁の豊かな暮らしを目の当たりにした私は、「自分もいつか大工になって、豊かな生活を送りたい」と夢を抱くようになりました。

最初の1ヵ月は、定時制高校に通いながら親方の手伝いをしていました。しかし、朝早くから作業を手伝い、昼間は学校で勉強、帰宅後も仕事をするという日々は長く続かず、その後は仕事一本と決め、5年間、厳しい修行に励みました。

夢を叶え、建設会社の取締役に就任

20歳を迎えた春、私は秋田から茨城へと住まいを変えました。それは秋田での修行時代にお世話になった先輩が、取手市の工務店に大工として勤務していたことがきっかけです。

当時、取手駅から都内への快速運転が開始し、都市化が進んだことで、まちは建設ラッシュに包まれていました。そのため、「取手へ手伝いに来てほしい」と先輩からお願いされたのです。

勉強は苦手だった私ですが、腕には自信があり、性格も比較的素直だったため、同僚や先輩からは大変良くしていただきました。

就職してから6年後の1973年（昭和48年）、私は気の合う仲間たちとともに、新たに工務店を立ち上げました。社名を大利根建設株式会社といい、私は取締役に就任しました。

私たちの会社は、一般住宅から公共施設まで幅広く工事を請け負い、業績は右肩上がりとなっていきました。しかし、バブル経済が崩壊したことで大きな打撃を受け、事業は失速してしまいました。

湯治治療で訪れたまちでの出会い

1990年（平成2年）、私は椎間板ヘルニアを患い、7月に大きな手術を行いました。そして、その翌月から、腰の湯治治療を目的に、大子町を訪れるようになりました。

大子に通い始めて2ヵ月目のある日、私はふと大子に有名な硯の先生がいることを思い出しました。後に私の師匠となる星野岱石先生が作る「国寿石 大子硯」が、当時何度もメディアに取り上げられていたため、記憶の片隅に残っていたのです。

私は町役場に問い合わせて住所を教えてもらい、恐る恐る工房を訪ねました。すると、岱石先生は「良く来たね」と温かく迎えてくれました。

ちょうどその頃、妻が取手の書道教室へ通い始めていました。一方で私は、書も絵もたしなみませんでしたが、モノづくりには自信がありました。そこで、「妻のために硯を作ってみたい」と申し出たところ、先生は快諾してくれました。

その後、2泊3日で工房に通い、先生から指導を受けながら、私は小さな硯を作り上げました。これが「国寿石 大子硯」との出会いです。

出会って1ヵ月で弟子入り

岱石先生と出会って1ヵ月後、「国寿石 大子硯」の魅力にとりつかれた私は、建設会社の取締役を務めながら、弟子入りしました。当時、後継者を探していた先生にとっても良い時節でした。

取手と大子の往復が続く中、1992年（平成4年）に最愛の妻が亡くなりました。とても辛い時期を過ごす中、私は将来的に大子で暮らすことを決意し、2年後、現在の工房が建つ土地を購入して自前で家を建て始めました。

硯を彫る作業の様子

岱石師匠との思い出を語る岱山氏

ご襲名された名前の由来をお聞かせください。

師匠よりも大きくなることを願う名前

岱石師匠から「私の後を継いでほしい」という言葉を聞いた時、正直、私は「硯一本で生活することは容易ではないだろう」と思いました。

しかし、私はモノづくりに対する強い自信を胸に覚悟を決めました。そして、修行に本腰を入れるため、2000年（平成12年）に取締役を辞任し、大子町の住民となったのです。

弟子入りした頃は、都内の百貨店などで行われる師匠の展示会を手伝い、その後、徐々に自身の作品づくりに没頭していきました。

翌年5月、私は師匠の名前の一部である「岱」をいただき、「岱山（たいざん）」を襲名しました。「岱石」は、その昔、修行僧が暮らす山の中腹にあり、修行僧を見守っていたという石の名に由来しています。そして、私の名は、石よりも大きな「山」になってほしいという願いが込められました。

「国寿石 大子硯」の歴史、ご自身の作品の特徴についてお聞かせください。

佐竹氏や水戸徳川家が愛した「国寿石 大子硯」

「国寿石 大子硯」は、日本名硯の１つに数えられます。その昔、常陸国を治めていた佐竹氏は、この地で作られた硯を将軍に献上しました。

独特の黒い艶と美しい石紋が特徴の「国寿石 大子硯」の原石は、大子町小久慈（こくじ）の槐沢（さいかちざわ）で採掘した黒色粘板岩です。水戸藩２代藩主の徳川光圀は、産地を守るために採掘を禁じ、９代の斉昭は小久慈という地名から「国寿石（こくじゅせき）」と命名しました。

その後、作り手が途絶え、「国寿石 大子硯」は存亡の危機に瀕しました。しかし、岱石師匠が独学の技と信念で復活させたのです。

大子第二高等学校（現大子清流高等学校）の職員であった岱石師匠は、幼い頃に父親から「小久慈の槐沢に、水戸徳川家が愛用した硯石がある」と聞かされたそうです。1957年（昭和32年）から石を拾い集め、約10年の試行錯誤の末、遂に「国寿石 大子硯」を完成させました。

「和硯の最高傑作」と高い評価を受ける

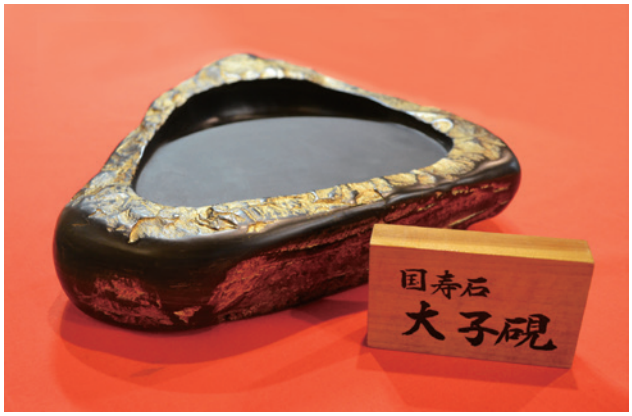
「国寿石 大子硯」の表面を顕微鏡で見ると、表面がキラキラと輝いています。これは金を含んだ「黄鉄鉱」の特徴であり、この黄鉄鉱が“硯の命”ともいえる「鋒鋩（ほうぼう）」を作り出しています。

「鋒鋩」とは、大根おろし器のギザギザ部分と同じ機能を果たし、軽くこすっただけで墨おりが良く、硯自体がすり減ることもありません。

多くの黄鉄鉱が含まれている「国寿石 大子硯」は、世界最高峰と称される中国の端渓硯にも勝るともいわれています。篆刻作家で、硯の研究家でもある藤波曽川先生からは「和硯の最高傑作」と評価していただくことができました。

私の作品の特徴は、原石の自然な形を活かして丸みを出し、形に合わせて３～４つの脚を付け、仕上げに世界一の漆と称される「大子漆」を塗り、美しい黒色を際立たせています。

以前、ある方から直売所で購入した「大子硯」を見てほしいと依頼されたことがあります。しかし、鋒鋩の多い面が側面になるなど、師匠や私が作った硯ではありませんでした。このような事態を避けるため、当工房の作品には、必ず「国寿石 大子硯」と彫るようにしています。



岱山氏作「国寿石 大子硯」

天皇皇后両陛下や皇太子殿下にも献覧

2003年（平成15年）、「国寿石 大子硯」は、茨城県知事より「茨城県郷土工芸品（第51号）」の指定を受けることができました。また、「いばらきデザインセレクション2006」において「審査委員特別賞」の受賞も果たしました。

そのほか、笠間神社への奉納をはじめ、2008年（平成20年）には皇太子殿下へ、その2年後には天皇皇后両陛下へ献覧しました。

書道家の中には、私が作った「国寿石 大子硯」の高い評価を聞きつけ、「本物をひと目見たい」と遠方から当工房に訪れる方もいらっしゃいます。

現在、「国寿石 大子硯」は、大子町特産品流通公社「グランだいご」などの一部を除き、小売店での販売は行っていません。

それは、「簡単に手に入らない」という希少性を高めると同時に、当工房でお客さま一人ひとりに対して丁寧に説明し、価値を理解した上でご購入いただきたいと考えているからです。

岱石師匠への想い、硯業界への想いなどについてお聞かせください。

師匠の功績を称えた記念碑を建立

2012年（平成24年）7月24日、岱石師匠が94歳で永眠されました。3ヵ月後には「岱山」襲名10年目の節目に、岱石師匠の功績を称える記念事業を執り行おうとしていた矢先のことでした。

現在、道の駅「奥久慈だいご」の一画には、記念行事を待たずして旅立たれた岱石師匠の未完の作品（横45cm、縦60cm、厚さ9cm）がはめ込まれた記念碑が建っています。

近年、全国を見渡しても、硯をはじめとする伝統工芸品の工房は、後継者不足が深刻な問題となっています。硯業界でも墨汁が開発されて以降、硯を求める方は減少しており、硯一本で生活を成り立たせることは大変難しい状況です。

しかし、手作業で一つひとつ丁寧に作る工程は、大手企業が真似することはできません。私は「国寿石 大子硯」の後継者、また、この地域が作り出した伝統文化を受け継ぐ者として、「国寿石 大子硯」が作り出す独創的な世界観を「美術品」として昇華させていきたいと考えています。

星野岱石氏の功績を称える記念碑

体験教室で「国寿石 大子硯」の魅力伝える

私は、硯自体にあまり親しみがない方々にも「国寿石 大子硯」の魅力を感じていただきたいと考えていました。そこで、2002年（平成14年）に「国寿石 硯遊会」を設立し、子どもたちを対象とした硯彫りの体験会を開催しています。

また、大子清流高校の生徒をはじめ、茨城大学書道部の学生や都内の美術大学に通う学生のほか、今年の8月、9月には25名を超える団体客が当工房を訪れ、硯彫りを体験していただきました。

体験者の中には、「指導 岱山」と刻印したいというリクエストをいただくこともあり、とても嬉しい気持ちになります。

今後も体験教室を通して、多くの方に「国寿石 大子硯」の深い味わいと親しみを感じていただきたいと感じています。

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

佐藤先生（中央）、大子支店 根本支店長（左）と
聞き手・藤咲耕一